
椋山女学園の歩みを伝える

—学内連携・映像制作の試み—

柊 窪 優 二

要旨

文化情報学部柊窪研究室と椋山歴史文化館とは2011年度から連携・協力して、椋山女学園の歩みを映像で伝えるプロジェクトに取り組んでいる。2016年度は創設110周年の歩みを伝える映像記録「椋山女学園の歩み～人間になろう～」(本編23分)を制作した。このプロジェクトについて、企画側・椋山歴史文化館と制作側・柊窪研究室の双方で確認・評価したところ、当初の企画に沿った満足できる映像記録が出来上がり、有効に活用されていることがわかった。その背景には制作過程で仮映像を何度も制作し、必要に応じて内容確認・打合せ・修正を繰り返すなど、プロジェクトの進め方が適切だったことが挙げられる。映像記録「椋山女学園の歩み」はDVD版1000枚を作成、学園の全教職員に配布され、自校史教育の映像教材として活用されている。インターネット時代のメディア教育、映像アーカイブの記録・発信の新しい試みとして、プロジェクトの概要や成果を報告した。

1. はじめに

椋山歴史文化館と文化情報学部柊窪研究室(メディア情報学科)は2011年度から連携・協力して、椋山女学園の歩みを映像で伝えるプロジェクトに取り組んでいる。これまでに椋山歴史文化館・映像シリーズ¹⁾(1本の長さ=3分～6分)を8本制作し、2016年度には創設110年の歩みを紹介した映像記録「椋山女学園の歩み～人間になろう～」²⁾(本編23分)を制作した。これらの映像作品は学生の卒業研究作品として制作され、メディア情報学科の教育実践の場にもなっている。完成作品はインターネットで動画公開すると共に、自校史教育の映像教材として活用されている。こうした映像記録を学園内で独自に企画・制作し、教育や広報に積極的に活用している例は国内では珍しい。そこで本稿では、これまでのプロジェクトの内容

や制作過程を、映像記録「椋山女学園の歩み」(2016年度)制作を中心に報告した上で、学内連携による映像制作の成果や意義を考察した。

2. プロジェクトの概要

このプロジェクトは、2011年に著者が学生の卒業研究テーマとして映像制作したいと思って、椋山歴史文化館に提案したのがきっかけでスタートした。柊窪ゼミでは毎年、「映像で伝える」を研究テーマに、東山動植物園や名古屋市広報課、名古屋市科学館、トヨタ博物館など、地域の様々な団体と連携して、社会貢献につながる映像作品を制作している。こうした地域連携プロジェクトを通して、質の高い教育を実践することをめざしている。こうしたなか椋山女学園は創設から長い歴史があり、学内に椋山歴史文化館も設置されている。そこで椋山歴史文化館をテーマにした映像

シリーズを制作・公開し、椋山女学園の歩みや教育理念を広く紹介したいと考えた。この提案に対し、椋山歴史文化館・椋山美恵子館長の積極的な協力が得られ、2011年度から映像シリーズの制作を開始した。

映像制作はゼミ学生（3人～6人）が作品ごとに制作チームを組織して取り組んだ。作品テーマは椋山歴史文化館側と相談して決めた。撮影台本の作成、カメラ撮影、映像編集、ナレーション、音響効果/選曲、字幕スーパー（CG）挿入など、全ての制作工程を学生が教員の指導を受けながら担当した。作品は必要に応じて館長や卒業生などが出演する形で構成した。すべてハイビジョン制作で、作品1本を完成するのに要した期間は3～4ヵ月であった。これまでに制作した作品は下記の通りである。

【椋山歴史文化館・映像シリーズ】

- ①歴史を学ぶと未来が見える 2分45秒
(出演：椋山館長 2011年6月)
 - ②金メダリスト・前畑秀子を知る 4分00秒
(出演：元職員/椋山館長 2011年11月)
 - ③金剛鐘の歴史と意味 3分49秒
(出演：椋山館長 2011年11月)
 - ④学園章の思いと願い 4分32秒
(出演：椋山館長 2012年1月)
 - ⑤教育理念・人間になろう 5分02秒
(出演：学園理事長 2012年1月)
 - ⑥裁縫雛形から学ぶ 4分25秒
(出演：卒業生/椋山館長 2013年1月)
 - ⑦椋山女学園と戦争 6分00秒
(出演：卒業生/椋山館長 2013年1月)
 - ⑧椋山女学園と制服 5分42秒
(出演：卒業生/椋山館長 2014年1月)
 - ⑨椋山女学園の歩み～「人間になろう」～
(23分00秒、2016年11月)
- ★①②③の英語版作品を2013年2月に制作



写真1 ①歴史を学ぶと未来が見える



写真2 学生が館長にインタビュー



写真3 ②金メダリスト・前畑秀子を知る



写真4 ③金剛鐘の歴史と意味



写真5 ③金剛鐘の歴史と意味



写真9 ⑥裁縫雛形から学ぶ

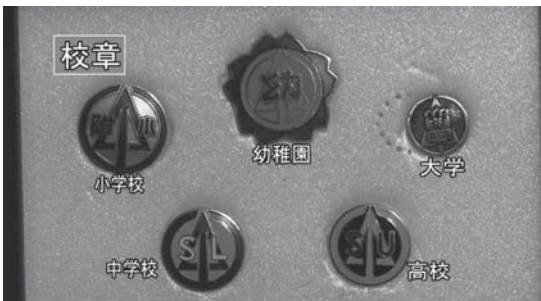


写真6 ④学園章の思いと願い

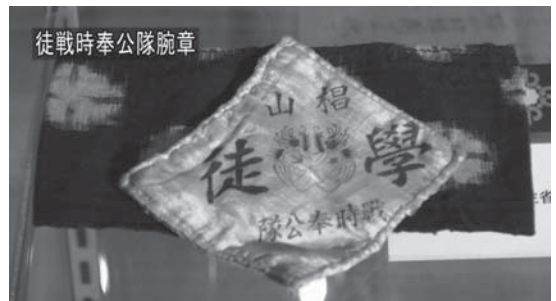


写真10 ⑦椋山女学園と戦争



写真7 ⑤教育理念・人間になろう



写真8 ⑤教育理念・人間になろう

3. 映像記録「椋山女学園の歩み」制作

2016年度に制作した映像記録「椋山女学園の歩み～人間になろう～」について報告する。この作品は、これまでの椋山歴史文化館シリーズとは違い、長さが23分もある長編作品である。創設から110年の学園の歩みを1本の映像記録にまとめたものである。

(1) 企画

この作品の企画は椋山歴史文化館から提案された。これまで館長が椋山女学園の歩みを生徒や学生に紹介するとき、PCパワーポイントを使って、スライド(写真)を見せながら話をしてきた。その内容を写真と動画で映像に構成して、それにナレーションをつける形で伝えたい、という提案

だった。制作側としては、ナレーションに対応する映像素材（写真や関連動画）があれば可能だったので、制作することにした。映像記録として、テンポ良く、視聴者が飽きないで見られる内容を目指した。担当はゼミ4年生の学生5人で、制作期間は2016年4月～11月に設定した。

(2) 構成

構成案（ナレーション台本案）は椋山歴史文化館側から提示された。最初に提示された構成案を教員（著者）が映像作品のナレーション原稿として少しリライトし、ラフな映像台本（第1稿）を作成した。それをもとに必要な写真や映像資料を歴史文化館から提供してもらい、それをもとに何度か台本を修正する形で、事前準備をした。その過程で、昭和20年代から30年代の創設者・椋山正式先生の貴重な8ミリ動画があることが判明し、それを有効に活用することを決めた。また過去に制作した椋山歴史文化館シリーズの撮影映像のなかに、今回使用できる映像が数多くあることがわかり、そうした映像を使用することを前提に台本を修正して、最終台本を作成した。

(3) カメラ撮影

この作品では、昔の写真や動画、過去に撮影した資料映像を中心に使用するので、新たに撮影する映像は少ない。オープニング、エンディング用のイメージ映像、現在の星が丘キャンパス、各学部棟の外観などをカメラ撮影した。山添キャンパスでは創立30周年記念で設置された「孝経幢」などを撮影した。

(4) 映像の編集

台本が完成したあと、カメラ撮影と並行して映像編集を進めた。今回はナレーションでの説明が多くなるので、編集段階で仮ナレーションを収録し、それに合わせて映像をつなぎ合わせた。昔の出来事を当時の写真で説明する部分が多く、映像

素材が足りない部分も出てきた。そうしたケースでは、ノンリニア編集の映像効果・EFFECT機能を使って、写真を拡大し、PAN・ズームインのような映像を動かして変化させる工夫をした。ある程度、編集が進んだら、映像に音楽や効果音をつけた。写真に音声はないので、当時のイメージを伝える上で、選曲・音響効果は重要になる。学園歌を紹介する部分は学園歌CDを使って歌を聞かせるように構成した。金剛鐘の紹介では、現場で収録した金剛鐘の音を挿入した。また字幕スーパーで映像に対する補足説明をした。こうした作業を経て、長さ23分の記録映像のベースが完成した。

(5) ナレーション収録・仕上げ

ナレーターはゼミ4年生が担当した。この作品は創設から今日に至る110年もの歩みを紹介するので、ナレーション原稿がとて多い。また昔の言葉や特有の言い回しもあり、ナレーションの難易度は極めて高い。そうしたことも含めて、ゼミ学生のなかで最もナレーションが上手い学生を担当させた。まずナレーターは、仮ナレーションを収録して、それをもとに椋山館長と打合せをした。そこでアクセントやイントネーション、言葉の速さなどを確認した上で、2016年10月に本番ナレーションを収録した。こうした映像作品は、本編中にナレーションのない「間」を設けることが重要になる。特に本編の長さが23分もある長編作品は、映像だけで見せるシーンや、音楽だけで見せるシーンをバランス良く構成することが大切だ。それが視聴者にとって息抜きになり、視聴者が自ら作品テーマについて考え、当時の状況や出来事を自然な形で受け入れることにつながる。本番ナレーション挿入後に、そうした視点で映像のつなぎ（編集）を微調整して、2016年11月に作品は完成した。

(6) DVD版の制作・発注

作品を広く活用するためにインターネットでの動画公開のほかにDVD版を作成することにした。DVDの原版は、映像編集に使用した編集ソフトEDIUS PRO 5で簡単に作成できる。ただしDVDを数多く作成するには、専門業者にDVDのプレスを発注する必要がある。地元業者だと費用的に割高になるので、こちらでDVD原版を作成し、レーベル等のデザインを施した上で、そのデータと一緒に国内最大手のDVDプレス業者に発注し、作成費用を軽減した。納品された「椋山女学園の歩み・DVD版」(1000枚、学園研究費Bで費用負担)は栃窪研究室から椋山歴史文化館に寄贈し、学園の全教職員に配布された。



写真11 椋山女学園の歩み・DVD版



写真12 学生から館長にDVD版を寄贈

4. 映像作品の公開・活用

映像作品はインターネットで動画公開すると共に椋山歴史文化館などで上映展示されている。また映像教材としても活用されている。これまでに制作した映像作品の主な公開・活用は下記の通りである。

【インターネット動画公開】

- ・椋山女学園大学YouTube
- ・文化情報学部サイト (学生制作の映像作品)
- ・椋山歴史文化館サイト (映像で見る! 「歴史文化館」)

【上映展示】

- ・椋山歴史文化館で上映展示 (①～⑧) 常時
- ・椋山女学園の歴史展(揚輝荘) (⑨) 2016年
- ・前畑秀子写真展(千種区役所) (②) 2016年

【大学の授業教材等への活用/DVD版配布】

- ・生活科学部「ファーストイヤーゼミ」などで①～⑧を使用
- ・全学共通科目「人間論」(自校史教育)で⑨を教材として使用
- ・学園の全教職員に⑨DVD版を配布



写真13 「椋山女学園の歴史」展(揚輝荘)

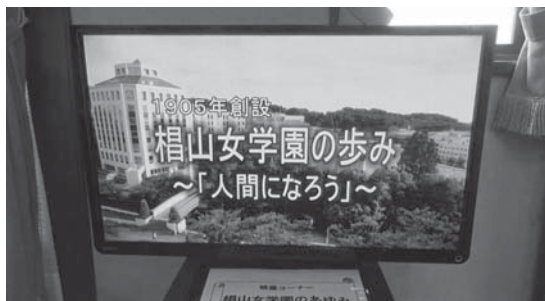


写真 14 上映中の「椋山女学園の歩み」

5. プロジェクトの成果・意義

2016年度の「椋山女学園の歩み」制作プロジェクトについて、企画した椋山歴史文化館（椋山美恵子館長）と映像制作側（著者）の双方で、プロジェクトの進め方や成果、意義などについて確認・評価した。椋山歴史文化館の評価（受け止め方）は著者が椋山美恵子館長にヒアリング調査した。

（1）企画側・椋山歴史文化館の評価

【企画意図】

今回の映像化を企画したのは、5年ほど前に中学校から「入学式後の父母に自校史の話を」という依頼があり、そのために作ったパワーポイントがきっかけになっている。このパワーポイントはその後、山添の生徒や大学のフレッシュマンゼミ（文化情報学部メディア情報学科、生活科学部生活環境デザイン学科）などで講演する時に使用していたが、毎年その機会が多くなっていたので、もう少し効率的にできるようにしたいと考え、映像化を企画・提案した。映像化にあたり、中学1年生にもわかるような内容を目指した。

【プロジェクトの進め方】

映像記録「椋山女学園の歩み」は、自校史を伝えるパワーポイントを映像化したものだ。台本案

は、パワーポイントの講演内容を精査して作成した小冊子「椋山女学園のあゆみ」（2016年4月1日発行8頁建て）をほぼそのまま生かした。この冊子をもとに、同年12月に写真や資料を加えた12頁建ての冊子を作成し、全教職員に配布。2017年4月には小・中・高・大の各1学年全員に配布した。

映像作品として制作するにあたりパワーポイントに使っている写真だけでは足りなく、それを埋める写真や創設者の昔の映像を探し出して、映像に取り入れていただいた。

今回のプロジェクトでは制作側が完成されるまで5回程度、仮ナレーションをつけた仮映像を作成し、双方でその内容を確認することができた。また仮映像について様々な意見を出せたので、こちらの要望に沿った作品を作ることができた。なかでもナレーションについては、読むスピードや抑揚などについても要望を出して、満足できる内容に仕上がったと思っている。こうしたことからプロジェクトの進め方は適切で、とても良かったと受け止めている。

【完成作品について】

完成作品は、当初の予想を上回る内容になったと評価している。限られた時間で、限られた写真・動画等を活用して、長い歴史のミニマムを伝えるという、当初の企画意図に沿った映像化ができたと考えている。完成後、DVD版が作成され、それを学園の全教職員に配布、各学校で自校史教育に活用されている。DVD版については関係者から好評の声が届いている。

【プロジェクトの成果】

今回のDVD版が完成したことで、小冊子に映像・DVD版が加わり、自校史教育の教材が整った。平成29年度から大学の教養教育科目「人間論」で自校史教育が体系的に始まり、その教材としてもDVD版は間に合ったので、良かった。

【プロジェクトの意義】

校内連携のプロジェクトという形で、自校史を考え、相山の学生と一緒にその映像記録（教材）を作れたことが良かった。学生の主体的な取り組みを育成できたことが大きな成果で、大きな意義があったと思う。映像制作を担当した学生にとっても大きな意味があったと思う。続編の制作など機会があれば、今後もプロジェクトを続けたい。

(2) 映像制作側(著者)のプロジェクト評価 【映像制作について】

今回の映像は、相山女学園の110年の歩みを伝えるもので、普通のドキュメンタリーや社会情報番組とは違う。過去の歩みや出来事を、限られた写真等の資料で伝えることが求められる。極めて難しい映像記録である。このため教員・プロデューサーとしては、できるだけコンパクトに、テンポ良く、興味を持って視聴できるような映像構成を目指した。作品の長さはできるだけ短くしたいと考えたが、盛り込む内容が多く、最終的には23分になった。作品の性格上、ナレーションの量も多くなった。しかし時代ごとに区切りをつけて(映像ロールにわけて)「歩み」を伝えたり、音楽を使ったり、適当な「間」を設定するなど、様々な工夫をした。作品の基本となった自校史教育のパワーポイントは写真だけで構成されていたが、映像記録では動画も使用できる。そこで昔の映像を探し、戦後(昭和20年代)から星が丘キャンパス建設(30年代)にかけての、創設者・相山正式先生を映した8ミリ映像を使用した。相山正式先生の姿を動画で見たことがある人はほとんどいない。そうした点でも価値のある映像記録の制作を目指した。

【プロジェクトの進め方】

映像制作プロジェクトは、企画側と制作側との打合せや作品内容の確認をしっかりと行うことが、優れた映像を制作する重要なポイントになる。栢窪研究室では、これまで様々な団体と共同制作プ

ロジェクトを進めているが、その進め方は映像作品によって違う。今回は必要な写真等を探す必要があり、内容的にも難しい部分が多く、普通のプロジェクトより、内容確認・打合せを頻繁に行う形で進めた。ただし映像制作の打合せは、言葉で確認しても意思疎通できないことが多い。そこで制作工程ごとに仮映像を第1版～第5版まで作成し、それを企画側・制作側の双方で確認して進めた。映像編集はノンリニア編集で行っているのので、仮映像にはすべて仮ナレーションをつけ、作品をイメージできる状態にして、写真の追加・修正のほか、ナレーションや音楽、字幕スーパーの確認ができるようにした。これにより双方で的確に内容を確認・検討することができた。

【完成作品の評価】

2016年2月から事前の打合せと準備を進め、4月から制作作業を開始、11月に映像作品として完成した。大変難しい作品であったが、プロデューサーとしては当初の企画に沿った満足できる作品が完成したと受け止めている。限られた写真しか使えない部分も多かったが、的確なナレーションと音楽で、「相山女学園の歩み」をしっかりと伝えることができた。ナレーションについては制作過程で予想以上に難しいことが浮き彫りになった。原稿の量が多いほか、創設110年の歩みを伝える言葉なので、昔の難しい言葉も多い。今回のナレーションは、プロのアナウンサーでも大変難しい内容であった。そのナレーションを4年ゼミ学生の中でナレーションを得意とする学生に担当させた。その学生は大変苦労したが、最終的には見事なナレーションを収録し、輝く映像作品が出来上がった。プロ顔負けの立派なナレーションだった。

【学生教育・指導教員の視点】

映像制作は4年生5人が担当した。ゼミでの制作なので、学生の卒業作品であるが、学生たちはこれ以外にメインの卒業作品を制作していて、こ

の作品は卒業作品の番外編となっている。

今回の映像記録は「構成」が最も難しかったと思う。それについては教員と椋山歴史文化館で打合せ・調整して進めた。このため学生は映像編集、音楽の選曲、ナレーション収録、音声の編集・調整など、実務的な制作過程を分担して担当した。学生にとって、通常の卒業作品のような企画・構成面での負担は少なかったが、本編23分の長編映像を学生グループで作り上げたので、貴重な教育実践の場になったと受け止めている。作品の完成後、DVD版1000枚のプレスを業者に発注し、制作した作品がDVD化されたことは学生の大きな励みになった。この学生たちは、前年度から卒業作品として名古屋市の広報映像や東山動植物園シリーズ、震災シリーズ、地域文化・仏像シリーズ、東海の建築アーカイブなど、様々な映像作品の制作に取り組んで、これが最後の作品になった。指導教員としては、映像制作ゼミの集大成として、このプロジェクトを通して質の高い教育が実践できて、良かったと受け止めている。

【プロジェクトの成果】

こうした映像制作プロジェクトは、学生教育の実践フィールドという目的以外に、企画に沿った作品が完成できたかが重要な評価ポイントになる。今回は第三者による外部評価は行っていないが、企画側・制作側の双方で満足できる作品が完成したと受け止めていて、教育への活用と合わせて総合評価すると、プロジェクトは成功だったと判断できる。こうした映像記録/DVD版を作成する場合、外部の映像制作会社等に発注すると高額な費用が必要になる。今回は制作費用をかけずに「椋山女学園の歩み」を映像化して後世に広く語り継ぐ道筋をつけた、という意味でも成果は大きい。



写真15 学生スタッフのカメラ撮影



写真16 椋山歴史文化館での学生レポート



写真17 椋山歴史文化館でのカメラ撮影

6. まとめ

本稿では、映像記録「椋山女学園の歩み」の制作を中心に、椋山歴史文化館と柝窪研究室ゼミとの学内連携・映像制作プロジェクトについて報告した。こうしたプロジェクトは社会情報を映像で

広く発信すると共に、メディア教育に有効活用できるので、大学などの教育機関で積極的に取り組む例が増えている。その背景には、科学技術の進歩で映像制作機材の低価格化と高性能化が進み、インターネット・動画サイトで映像を容易に発信できる社会環境になったことがある。しかしながらそうした環境が整っても、こうしたプロジェクトに実践的に取り組んでいる大学はそれほど多くないのが現状である。映像制作は専門性が高く、制作機材が容易に入手できても、実際に活用できる映像作品を制作するのは難しいからである。大学によっては、学生を的確に制作指導できる教員の確保も難しいようだ。

今回のプロジェクトは、アーカイブ映像を制作して、「栢山女学園の歩み」を語り継ぐ、という栢山女学園・自校史教育の視点で、成果は大きい。コンピューターによるノンリニア編集による映像制作が普及し、インターネット・動画サイトによる情報発信が広がる情報化社会のなかで、メディア教育の方向性を考える新しい試みになった。学生の主体的な取り組みを育成できたことも、プロジェクトの大きな意義と捉えられる。今回の成果を支えに、学内連携・映像制作プロジェクトのあり方を吟味し、今後も実践的なメディア教育に取り組みたいと考えている。

この研究は平成28年度栢山女学園研究助成(B)による研究成果の一部である。

参考文献等

- 1) 栢山歴史文化館・映像シリーズ
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLSh8ziKtq8ljdDuOXIRXXy0v-BMKVl0fl>
- 2) 映像記録
 「栢山女学園の歩み～人間になろう～」
<https://youtu.be/CSqpANi2z3Y>

とちくぼ・ゆうじ/文化情報学部教授
 E-mail: tochikubo@sugiyama-u.ac.jp